石高神社報

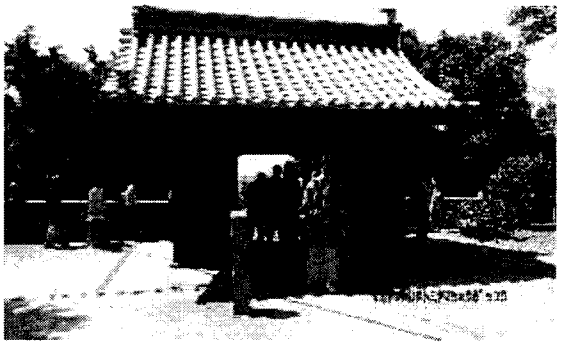
第三十三号

発行日　平成二十七年七月一日
発行者　石高神社　宮司　髙原　章兆
発行所　岡山市中区円山八五三
電　話　〇八六―二七七―九〇〇三

随身門修復完了報告と ご寄進のお礼

昨年秋に随身門の修復が終わり、今年の三月には、随身像の修復が完了し、予定していましたすべての工事を無事終えることができました。随身像をお納めして、一段と随身門が映えるようになり、宮司を始め関係者一同感慨の念に耐えません。この喜びを神様にお伝えすべく、五月の春季例祭の中で修復完了報告祭を執り行い、修復完了を祝いました。

平成二十年から二期にわたって町内を通じて集めていただきましたご寄進は、六、九五一、一五〇円に達しました。また、社頭にて、三、五〇九、〇〇〇円の御寄進をいただき、合わせて一〇、四六〇、一五〇円になりました。ひとえに氏子の皆様方のお気持ちの賜物であると、感謝申し上げます。出費ご多端の折柄、多くの方々にご浄財のご寄進を賜りまして、まことにありがとうございました。また、お忙しい中、ご浄材を集めてくださいました町内会の方々にもお世話になり、ありがとうございました。厚くお礼申し上げます。なお、一万円以上の御寄進を頂戴した方の御芳名を掲示することが、総代会で決まっています。地名別に仮掲示しましたので、誤りがございましたら、ご指摘ください。



随身門修復完了報告祭

収支報告

すべての支払いが完了しましたので、収支報告を以下のようにさせていただきます。

収入の部

修理寄付金	一〇、四六〇、一五〇円
前回の修理会計残金	八七、七〇一円
預金利子	一二、〇六二円
合　計	一〇、五五九、九一三円

支出の部

随身門修復工事代金	八、九二五、〇〇〇円
追加工事代金	八二〇、八〇〇円
随身像修復代金	一、〇三八、九六〇円
合　計	一〇、七八四、七六〇円
差し引き不足金	二二四、八四七円

不足金の充当

当初予定していなかった工事を行ったため、不足金が生じることになってしまいました。不足金は、先の社報でお知らせしましたように、町内で頒布していただいております御神札の初穂料で補いました。なお、社務所も全額この御神札の初穂料約二十年分で再建しましたことは、すでにお知らせしています通りです。その支払いも今回で終えることができましたので、引き続き不測の事態に備えて蓄えることにしています。しかし、頒布数がここ数年減少してきています。どうか、氏神様の御神札をいただいて、おまつりしてくださいますようお願い申し上げます。

町内別寄付金額（円）

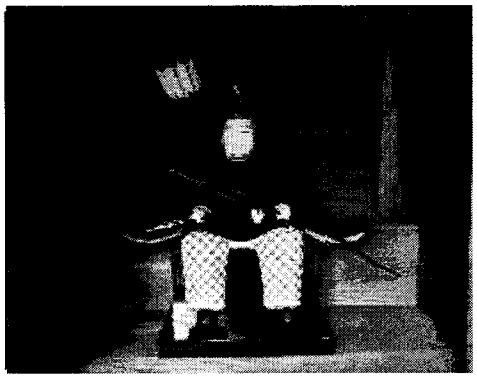
町内名	金額	町内名	金額
嶽	70,000	湊東	172,000
円山境内	512,300	湊中	179,300
円山宮西	783,650	湊西	148,500
円山中央	208,500	沢田	515,000
円山浜倉	627,000	赤田	488,000
円山団地	250,000	高屋	239,000
円山外新田	100,000	藤原	413,000
円山南	17,000	清水	416,000
福泊	794,000	関	236,500
山崎本町	566,100	追分	61,000
池ノ内	134,300	関北	20,000
		合計	6,951,150

随身像の修復

修理に出す前には、これがきれいになるのかと思えるくらい傷んでいましたが、りっぱに修復されて戻ってきました。今回が初めての修復ではなく、修理跡があったようです。百年もつような修理をするということでしたので、随身像の修復工程を業者に聞きました。

一、水で洗って木地のままに戻す。
二、寄木細工をばらばらにする。
三、ペーパーでニカワを取る。
四、木のへこみを引粉（のこぎりで引いた粉にボンド

を混ぜたもの）で埋める。
五、欠けていた手三つと足一つを、残っているものを見ながら新調した。
六、胡籙（やなぐい）（矢を携帯する容器）と矢三本が一組あったので、それを元に二組新調した。手に持つ弓矢と刀が両方とも無くなっていたので新調した。
七、塗りが滲みこまないように、漆を塗る。
八、顔は人形師、胴は彩色屋が書く。
九、烏帽子と冠を新調した。



新しくなった 随身像

随身・随身像とは

当社の随身門は、標準的な三間一戸八脚門で、切妻造りの本瓦葺きです。様式や風食からして、天保十年（一八三九年）建立の幣殿拝殿と同じころの造立と考えられています。（参考　岡山市の近世寺社建築）

随身門は、随身姿の守護神像を左右に安置した神社の門のことで、仏寺の仁王門にならって構えたものです。随身とは、平安時代以降、貴族が外出する時に警備に随従した武人です。そのため、「神門」の左右に、神を守る者として剣を帯び、矢を背負った衛門の姿をして安置されるようになりました。随身像は、左大臣(矢大臣)・右大臣、あるいは、豊磐間戸神（とよいわまどのかみ）・奇磐間戸神（くしいわまどのかみ）の二神ともいわれています。

向かって右側の方の位が高いので、黒袍（ほう）という上着をつけており、左側は赤い袍をつけています。また、よく見ると、向かって左の方が口を開けており（阿型）、右の方が口を閉じている（吽型）になっているのがわかります。何故か当社のものは、左右の阿吽が仁王門や他社のものとは逆になっています。

祝　見事に修復された随身門（一）

平成二十春に趣意書が配布されて以来、七年後にようやく随身門の修復が完了しました。時間はかかりましたが、合わせて随身像の修復も行うことができ、誠におめでとうございます。前総代の妹尾信義氏とともに、心からお祝い致します。　福泊総代　本澤　祥作

祝　見事に修復された随身門（二）

百段ほどの石段を上り切って境内に一歩足を踏み入れようとすると、つい上を見て「あの瓦、落ちてくるんじゃないか」と、急いで随身門をくぐっていたものです。

ところが、五月十七日の春季例祭の日、驚きました。すっかり修復された石高神社の随身門の屋根瓦は、朝の太陽の光を受けて銀灰色に輝いていたのです。この日は随身像の前の格子戸がはずされていて、二体の随身像がよく見えました。安置された像は、いずれもまるで平安時代の絵巻物にでも出てくるようなあざやかな黒や赤の袍をまとって鎮座していました。

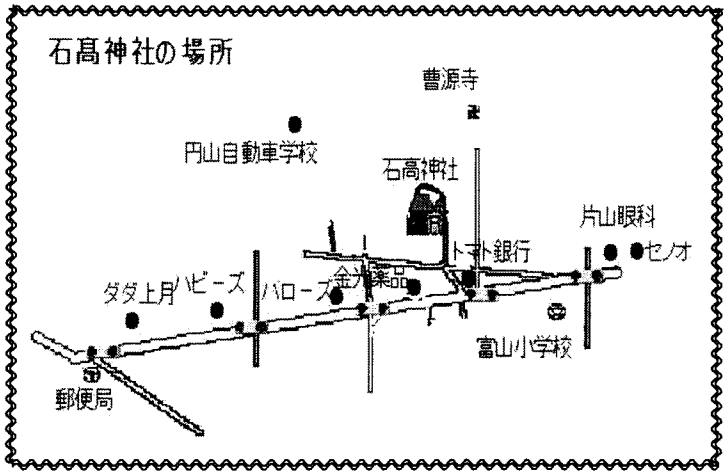
建物に使われている木材は、古い物をそのまま使ったり、新しい物に取り替えたりしているものもあるそうですが、ほとんど見分けがつかないほどでした。

石高神社の随身門は、一方で地域における大切な文化財であるとも思いました。これからも大切にして行きたいものです。随身門の修復完了を心からお祝い致します。

円山境内　総代　野村　定

夏まつり（輪くぐり）のご案内

旧暦六月の大祓えの行事は、夏越の祓（なごしのはらえ）と呼ばれています。また、輪をくぐるので、輪くぐりとも言われ、年の前半の半年間に受けた身体の穢れと心の罪を祓い清めるお祭りです。残りの半年間を、疫病を予防して健康に過ごせるようにする意味もあります。

紙でできたひとがたに、住所・生まれ年の干支・年齢・男女の別などを書いて息を吹きかけて、あるいは身体の調子の悪いところを撫でて、罪・穢れを移したひとがたを持ってお参りします。そして、茅の輪で作った輪をくぐり、お祓いを受けて茅の輪と疫神斎の御神札をいただきます。いただいた茅の輪と疫神斎の御神札は、門口につけてください。茅をつける風習は、ある情け深い人が神に告げられた通り茅の輪を作って腰に着けたところ、そのあと疫病が流行しましたが、その家だけが助かったという蘇民将来の逸話に由来しています。

当社の輪くぐりは、毎年七月三十一日の晩です。心と身体をきれいにすれば幸せを招きやすくなり、さらに多くの幸福が訪れます。どうぞご家族お揃いでお参りください。